

## Environment Coping Forum News Letter

南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究

発行：京都大学東南アジア研究所 編集：南出和余  
 住所：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46  
 URL：http://ecf.cseas.kyoto-u.ac.jp/

## ～ECF第1回ケーススタディ報告～



第1回バングラデシュ社会的ソフトウェア構築委員会での決定(ECFニュースレター1号参照)を受けて、2009年1月19日から24日にかけて、ガイバンダ県SKS Foundationトレーニングセンターにて、第1回のケーススタディワークショップ(兼第2回委員会)が実施された。今回はケーススタディ第1回目であるため、ワークショップとし、方法論の確立も視野に入れた。本ワークショップにはECFメンバーと研究者チーム計24名(左参照)が参加した。

## 調査地の概要

ガイバンダ県は、バングラデシュを東西に分けるように縦断するジヨムナ川(ブラフマプトラ川)の西岸に位置する。ジヨムナ川は水位変動が非常に激しく、雨季の洪水期には川底になる地域においても、洪水のピーク時の前後や乾季には人びとは農耕をおこなっている。中州の数も非常に多く、年間を通じて中州生活者も多い。こうした人びとの生活は、季節によって大きな違いがあることは言うまでもなく、さらに、毎年のように起こる洪水によるジヨムナ川の流路変動は、近年とくに著しく、恒常的な土地を確保することは難しくなっている。人びとは数年単位で住居移動を余儀なくされ、土地所有も保障されてはいない。

今回のケーススタディの受け入れを担当したSKS(Samaj Kallyan Sangstha)は、1987年から、ジヨムナ川流域および中州生活者を対象に、生活改善支援を活動としている。本部をガイバンダ県内におき、現在の活動地は、ガイバンダ、ロンプール、ボグラの3県に渡る。いずれもジヨムナ川流域に面した地域である。

## ワークショップの流れ

本プロジェクトは、当事者の経験知をもとに環境と開発の両立を考えることを目的としている。そのため、ケーススタディでは、参加型相互学習実践法であるPLA(Participatory Learning Action)を基本とする。ワークショップでは、まず、Session 1として、PLAについての基本理解講習が行われた。最初に、プロジェクト代表の安藤氏から、PLAの基本姿勢として、ローカルの人びとから学ぶ、環境に耳を傾ける、他者を知ることで自らを振り返る、という点が述べられ、本ケーススタディの意義は、SKSの活動を批判評価することでもなければ、助言することでもないことが述べられた。次に、ECF事務局Bimal Kanti Kuri氏(SSS)がPLA講習を行った。バングラデシュでは、80年代後半から各NGOの活動にPLAが導入されるようになり、ことにコミュニティビルディングにおいては欠かせない概念として受け入れられていることが確認された。

Session 2と3では、SKS活動地域におけるフィールドスタディが行われた。調査に際しては、以下5点に視点を置く。

- 1) What SKS is doing?
- 2) How community people act?
- 3) What service SKS is providing?
- 4) How community people cope with on-going program?
- 5) How SKS staffs cope with on-going program?

Session 2では、参加者全員が約10名ずつ2組に分かれてフィールドに足を運び、①ジヨムナ川流域地域の生活とSKS活動、②ジヨムナ川

## 参加者

## 【ECFメンバー (16NGO)】

1. Md. Helal Uddin : SKS
  2. Md. Shajahem Ali Akond : SKS
  3. Md. AbuHomjala Rana : AAN
  4. Md. Ayub Ali Mridha : BSUS
  5. Hlaching Mong Issac Murray : BDP
  6. Md. Akramul Islam : CHCP
  7. Md. Hamidul Haque : DUS
  8. Md. Rezaul Karim : IDF
  9. Md. Akkel Ali : JRDS
  10. Md. Miyanor Rahman : JRDS
  11. Md. Saidur Rahman : POPI
  12. Saidus Saklaen : PAPRI
  13. Pankaj Sarkar : SATU
  14. Md. Najmul Islam : TMSS
  15. Nanigopal Sarkar : UDOY
  16. Moksadul Alam : Projukti Peeth
  17. Bimol Kanti Kuri : SSS
  18. Nazmun Naher Kaisar :  
ECF Secretariat Officer
- 1/20のみ
19. Golam Sorwar : SKS
  20. Sayed A. H. Sunny : AAN
  21. Samir Chandha Adhikar : DUSH

## 【研究者チーム】

22. 安藤和雄 : 東南アジア研究所准教授
23. 矢嶋吉司 : 東南アジア研究所研究員
24. 南出和余 : 日本学術振興会研究員  
(地域研究統合情報センター)

スケジュール

- 1月19日(月)**  
 18:00 集合  
 21:00 夕食  
**1月20日(火)**  
 8:00 朝食  
**Session 1**  
 9:00 開会挨拶  
 参加者自己紹介  
 10:15 趣旨説明  
 11:15 休憩  
 11:40 PRA/PLA講習  
 13:30 昼食  
**Session 2**  
 14:30 フィールドスタディ1  
 18:30 簡単なシェアリング  
 20:00 夕食  
**1月21日(水)**  
 7:30 朝食  
 8:30 フィールドスタディ2  
 11:00 休憩  
 11:15 中州地域でのSKS  
 活動オリエンテーション  
 グループ調査  
 12:30 昼食  
 17:30 中州出発  
 21:00 夕食  
**1月22日(木)**  
 8:00 朝食  
 9:30 感想シェアリング  
 10:30 休憩  
**Session 3**  
 11:15 SKSスタッフ対話  
 13:45 昼食  
 14:45 SKS対話(続き)  
 16:00 休憩  
 16:30 SKSトレーニングセンター見学  
 17:30 終了  
 20:00 夕食  
**1月23日(金)**  
 8:00 朝食  
**Session 4**  
 9:30 感想の共有(発表)  
 11:00 休憩  
 11:30 感想(続き)  
 13:15 ナマーズ&昼食  
 14:30 感想(続き)  
 18:30 休憩  
 19:30 余興(歌)  
 21:00 夕食  
**1月24日(土)**  
 8:00 朝食  
 9:00 事務連絡  
 9:45 まとめ  
 10:30 休憩  
 11:00 まとめ(続き)  
 12:30 昼食  
 13:30 終了 / 出発

中州地域の生活とSKS活動、の観察と聞きとりを行った。おもに、SKSにおける生活改善や農業支援、女性集団のショミティ活動、医療プログラム、ノンフォーマル教育プログラムなどを行っている地域を回った。SKSスタッフが同行して活動内容が紹介されるとともに、住民がそれをどのように役立てているか、またその活動が始まる前後で何がどう変わったかなどの聞き取りがなされた。

Session3では、SKSスタッフによる活動報告をレクチャー方式で聞いた。Session2が実際の観察に基づいた一次資料であるのに対して、Session3は二次資料の観もあるが、スタッフがどのような考えのもとで活動を展開しているか、住民との対応を聞くなど、スタッフの視点に関する聞き取り調査でもある。

Session4として、フィールドスタディでの気づきを掘り出す作業が行われた。方法としては、KJ法が用いられた。フィールドスタディ参加者全員が、それぞれの気づきや重要だと感じたことを3つずつキーワードとして挙げた。各自が優先順位をつけ、優先順位1位のものから一人ずつ発表した。それらを、生活環境(Livelihood)、農業(Agriculture)、教育(Education)、保健(Health)、自然環境(Environment)、マイクロクレジット(Credit Program)、衛生(Hygiene)、その他、に区分し、優先順位ごとに特徴を見出し、ジョムナ川流域中州地域における人びととSKSによるCoping Mechanismの解明を試みた。

なお、キーワードを挙げてもらうに際しては、上記のカテゴリーは気にせずに思うままに書いてもらった。全てのキーワードが出そろった時点で、カテゴリー毎に分類した。したがって、同一人物の優先順位1位と2位がいずれも同一カテゴリーに属することもある。

**当事者の視点による優先課題の発掘**

KJ法による感想を、カテゴリー×優先順位で分類すると、表の票数となった。

優先順位	1	2	3
Livelihood	11	4	4
Agriculture	7	4	2
Education	2	3	2
Health	1	5	6
Environment		4	5
Credit Program			1
Hygiene			1
None		1	

**優先順位1位**

参加者の多くが優先順位の1位に挙げたのは、生活環境に関する点であった。とくに、SKSからの働きかけもあって、多くの流域中州居住者が、農業よりも家畜を重んじていることが明らかとなった。その理由は、雨季には浸水するために農業はほぼ不可能になるが、家畜は年間を通じて維持することができる。また、季節ごとの移動や突発的な自然災害の際に、家畜(牛)であれば比較的容易に移動させられることが理由として挙げられる。さらに家畜は財産維持としての機能も果たしている。持ち運び可能な財産という点では、家屋も、土壁や煉瓦造りよりトタン張りが好まれる。洪水の際にも解体移動が可能で、再度利用できるからである。



農業における取り組みについても、多くの者が優先順位1位としている。その内容は、流域地の砂地でも栽培可能で、かつ乾季の短期間のうちに収穫可能なジャンプ草や砂地でのかぼちゃの栽培である。ジャンプ草は、家畜の餌に適している上に、雨季に入る前に根を掘り起こしておけば、水が引いた後再度植えることが



可能という利点を持ち、彼らの季節移動生活に適している。かぼちゃ栽培も、それまで利用不可能であった砂地での栽培技術をSKSが伝授し、乾季の換金作物として栽培が広がっている。また、短期のうちに同じ場所で3種類の農作物を回転栽培する手法や、収穫までの期間が短い品種の改良など、当該地域の状況にあった農業の開発と提供が行われている。

教育や保健の部門では、いずれも移動型の学校病院が挙げられた。

これら優先順位1位として挙げられた点は、いずれも、恒常的な生活改善ではなく、洪水や流域移動の影響による人びとの移動を前提とした生活改善の、具体的な取り組みである。

### 優先順位2位

優先順位2位になると、1位よりもばらつきが見られる。生活環境に関する項目では、優先順位1位で挙げられたような取り組みが、結果的に女性のエンパワーメント・アドボカシーの機能を果たしていることや、個別の取り組みが人びとの生活のなかで統合性を有することなどが挙げられた。また、農業部門で見られた取り組みは、いずれも地域住民にとっては全く新しいものではなく、既存の技術に改良を加えたものすぎず、だからこそ人びとは抵抗なくそれを受け入れることができたのではないかと、という連続性についても述べられた。これらは、優先順位1位において述べられた具体的な取り組みに対して、間接的効果という特徴をなしている。

さらに、教育や健康の面においては、現状からさらなる改善を図るための提案などが出された。

### 優先順位3位

優先順位3位では、2位以上にさらなる多様性が見られた。興味深いのは、生活環境においても農業においても、優先順位3位で述べられた事柄は、流域地域の固有文化の維持についてであった。例えば、稲の改良種が横行する現代にあつて、ヒエ種の栽培を維持することは、当該地域の気候と土地の栽培力、手間を考えれば改良種より適している。SKSはそれを否定することなく、人びとの知恵と実行を尊重しながら新たなものを持ち込み、多様性をもたらすという姿勢をとっていることに対する評価は高い。教育においても同様に、ペンケースなどの日用品は地域で入手可能な素材(竹など)を利用し、生活との接点を重視している。こうした伝統文化(知識)への配慮が、当該地域の環境を考慮した開発にとつては不可欠であるという見解が得られた。

### 優先課題発掘に見られる関連性と段階

以上に挙げた優先順位1位から3位までの視点を段階別にみると、明らかな傾向が捉えられる。上記でも述べたように、優先順位1位に挙げられた項目は、生活環境や農業の分野を中心に、具体的な取り組みが目立つ。続く優先順位2位では、具体的な取り組みがもたらす間接効果や情報提供に関する内容になっている。これは、SKSの活動が、多様性をもちながらも相互に関連し合い、人びとの生活を基盤として機能する仕組みになっていることに関係すると言えるだろう。さらに、優先順位の3位になると、流域地域の既存の文化や人間性への配慮が示される。住民中心(参加型)の開発を進めるには、その地に根ざした文化や生活スタイルに合った方法をとることが不可欠であり、その点が、優先順位の3位として挙げられたものと考えられる。



### 暮らし(LIVELIHOOD)におけるCoping

上記の優先順位に見られるように、本ケーススタディでは、生活環境(Livelihood)におけるCoping Mechanismが最も重要な課題とされた。

参加者が捉えた当該地域における環境問題の重点は、毎年のように起こる洪水、川の破壊と流域変動、突発的台風による川岸の破壊、雨季に土地を失う人びとの労働問題、という点にある。こうした環境に応じた生活改善の取り組みとして、以下の活動において、Coping Mechanismが捉えられる。

- 1) 家屋基礎の強化(盛り土による基礎上げ)によって、小規模な洪水被害を免れる
- 2) 乾季の家庭栽培の促進
- 3) 家畜産業の促進
- 4) 改良かまどの推進

既述したように、当該地域における生活は、雨季と乾季では大差があり、さらに流域変動によって、屋敷地や耕地が河川浸食される脅威にさらされてきた。自然の力は巨大で、人びとは、生活スタイルを環境の変化に合わせた改善策を取らざるを得ない。そのためには、人びとは生活そのものを原点に生業を持続的にすることがもっとも賢明であることを経験のなかから学んできた。年間を通じた生活形態を考慮した全体的で直接的な関わりが必要とされる所以である。

さらに、人びとがSKSによるCopingシステムを独自に利用している例を挙げたい。SKSによって紹介された改良かまどは、持ち運び可能で燃焼効率の良さを利点に紹介されたものである(写真1)。燃料には牛糞を炭型に用いている(写真2)。しかし、女性たちは、それを伝統的な固定型のかまどにも利用し、放置しても火が絶えない「折衷かまど」を生み出した(写真3)。



写真1



写真2

そのことによつて、多少燃費率は下がるが、鍋を火にかけておいたまま他の仕事をすることができるといふ、女性にとっての便利さが付加された。

写真3



別の例では、洪水時の移動可能な収納箱は、嚴重に鍵をかけることによって、女性が他家で働く間の金庫の役割を果たし、人びとは乾季の間もそれを利用する。さらに、SKSが始めたノンフォーマル教育を手本に、人びとは、学校のない地域に簡素化した類似のコミュニティ学校を開始した。こうした人びとによる取り組みは、SKSによる環境に対するCoping Mechanismを、さらに生活にCopingさせた主体的な取り組みと見ることができる。それが可能なのは、SKSによる活動が、既存の生活技術をふんだんに取り入れものである、新しく持ち込まれた外来技術ではないからである。SKSと住民が、相互に、自然の脅威に対して暮らしを適応させる技術の改善を繰り返しながら、環境にあった開発(生活改善)を模索する姿こそ、まさにCoping Mechanismと言えるだろう。

### 結論: 評価批判ではなく当事者の関わりへ

以上のように、各実践者によるケーススタディの感想をKI法によって共有し、優先順位をつけて並べる過程から、ジヨムナ川流域地域における環境への対応と開発における段階的視点を抽出できたのは、非常に興味深く、これこそが、「社会的ソフトウェア」構築の仕組みであるという理解に達した。これが可能になったのは、以下2つの理由にあるものと考えている。まず、本ケーススタディを実施した参加者が全員、日頃からバングラデシュの開発に向き合う実践者であり、当事者による直観的視点を有していること。さらに、ケーススタディを、ただ漠然と流域中州地域の住民を対象に実施するのではなく、SKSによる活動という動的な材料を媒介としたことに寄る。こうした経験と実践に基づいた調査を行うことによって、そこに埋没したCoping Mechanismを発見することができ、社会的ソフトウェアとして、さらなる実践に結びつけることができるのではないだろうか。

本ケーススタディは、決してSKSの活動に関する評価ではない。研究者や支援者による批判評価に慣れているNGOにとっては、当初、このケーススタディが批判評価のためではないことを理解してもらうのに時間がかかったと言わざるを得ない。しかし、SKSの活動を見るだけでなく、住民の生活に目をやることによって、その繋がりと相互効果が明らかになり、そこに、厳しい環境にありながらも生活する人びとの然るべき暮らしとSKSの活動、強いては環境と開発の共存を見ることができた。参加者は、地域こそ異なれ、それぞれに厳しい環境と開発に向き合う実践者であり当事者である。今後続く4つのケーススタディを通じて、各地域の抱える環境問題と開発に、二律背反を超えて応対する実践知が明らかとなり、その実践知がECFネットワークの下で共有され、さらなる実践に繋がることを願っている。



(報告: 南出和余)